

世界のさまざまな英語 — 日本の英語教育に求められること

リチャード・C・スミス

はじめに

今回のシンポジウムのテーマは、言語の普遍性と多元性であるが、議論のひとつとして共通語としての英語の役割を挙げることができよう。Phillipson (1992) の明言するように、英語の言語帝国主義が、地域のアイデンティティや文化的・言語的多様性に少なからずの影響を及ぼしていることは否定できない。が、本稿の立場はこうした悪影響を否定するものでも、逆に、英語の広域化を自然発生的なものとして肯定する (cf. Ellis 1985) ものでもない。むしろ英語のヘゲモニーの「問題」は、英語 (あるいはその学習) 自体にあるのではなく、個人および国家レベルでどのようにそれを受け止め、取り入れるかにある点を指摘するものである。

前記の観点から、本稿では日本における英語の役割について、特に英語教育における捉え方を中心に論じたい。英語の優位性に対する教育における対応の姿勢としては、日本人生徒を英語から遠ざける (Toda, 1993) のでなく、世界中で異なるアイデンティティが英語で表現されている現実を認識させ、多種多様なアイデンティティへの意識を高めることを提案したい。具体的な

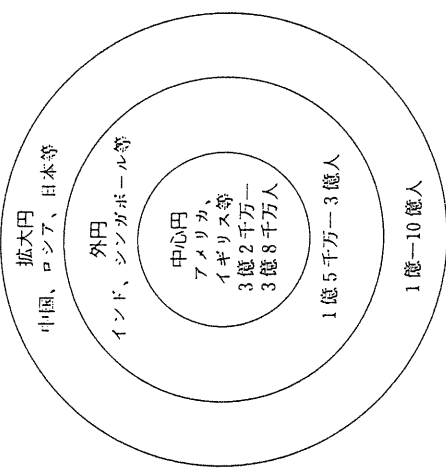
In Kawada, J. & Uemura, T. (eds.) (1997) *Bunka no Mirai*
Tokyo: Miraisha

提案に入る前に、世界の諸英語 (Englishes) の、地球的規模の多元化の現状について見ることにする。

1 世界における英語の多元化

左の図は、イリノイ大学のインド人の社会言語学者 Braj Kachru が、現在英語が使用され学

英語の三つの同心円モデル (Kachru, e.g. 1994 を参照)
人数は英語話者の数を示す (Crystal, 1995: 107-8)



ばれている地域を三つの同心円で表わしたものである。中心円には、人口の大多数 (ただし全人口ではない) の母語が英語である国々 (アメリカ合衆国、イギリス、アイルランド、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど) が含まれる。外円には、(多くはイギリスの植民地政策の結果) 大半は他言語を母語としているが、英語が重要な公用語や国語、すなわち国内のコミュニケーションの主要言語となっている地域が含まれる。ここには、多数のアフリカ諸国、カリブ諸国の一部、インド、パキスタン、スリランカなどの南アジア諸国、シンガポール、

マレーシア、フィリピンなどの東南アジア諸国などが含まれる。最後の拡大円には、日本を含め、英語を外国語として学習している地域が含まれる。なお、図中の英語話者数 (Crystal, 1995: 107-8) への幅は英語話者の測定基準の差によるものだが、外円と拡大円の話者の推計は、比較的控えめな数字となっている。

この図との関連でいえば、米国や英国など中心円の内部の間ですら英語に差が見られ、ましてや、世界中のさまざまな地域、さまざまな場面での英語の使用は実に多様である。そしてそれは地元での必要性に応じる形でいつそう変容していく傾向にある。このような現実を考慮するならば、英語が本来英米両国から広まっていった (Stevens 1980: 86) としても、今やその両国のみならず英語の規範を求めることはできないであろう。中心円の他の国、そして外円の国も、ますます独自の英語による自らのアイデンティティの確立に誇りを感じているようである。それは、マレーシアの観点からの次の言明にも表われている。

マレーシア人は今や、独自の英語に誇りを持っており、それをマレーシア人であることを示す特徴の一つとすら考えている。(Wong, 1982, Honna and Takeshita, 1995 より引用)

このような観点から、近年「世界の諸英語」(“World Englishes”: 複数形で表わされた英語)の研究が社会言語学の分野で進み、外円の国々で使用されている諸英語を分析、是認する試みが少なからず行われている。その主導的役割を担う Braj Kachru は、ハワイ大学の Larry Smith と共同で

雑誌 “World Englishes” も編集しているが、Kachru の研究 (主要著作は参考文献表を参照) や、David Crystal (1997: 11) の示すように、外円と拡大円の英語話者数が近い将来に中心円の英語話者数を上回るとすれば、世界の英語使用法の「規範」を、もはや英米両国のみを求めるのは妥当でないであろう。つまり、現在の英語使用法の基準設定に関する限り、Keats の言葉を借りれば「中心は持続することはできない」(つまり、中心円はもはや、英語の所有権を主張することはできない) のである。

また、Kachru は次のようにも述べている。

…英語の地球的規模の広がりはおもしろい展開を見せている。英語を母語とする人々は、英語の標準化をコントロールする特権を失ってしまったようだ。(Kachru, 1985: 30)

なお、シンポジウムでの発表では、世界の諸英語の多元化の具体例として、南アジアの英語の例を取り挙げたが、本稿では、紙面の都合上割愛する。詳細は雑誌 “World Englishes” を参照されたい。

世界の英語の多元化と、自国のアイデンティティを表現する手段として新しく生まれた英語の「標準」の議論として、最後に次の Chinea Achebe の文章を引用したい。これは、Achebe が、ナイジェリア英語独特の文語体を自ら発展させたことについて述べたものである。

英語は、私のアフリカでの経験をしっかりと伝えることができると思う。しかし、それは新しい英語でなければならない。それは、その祖国ときちんと交流できる一方で、新しいアフリカの状況に合うように変化した言葉だ。(Achebe, 1965, Kachru 1990: 11より引用)

この関連で、世界的に著名な作家である Chinua Achebe, Wole Soyinka (ナイジェリアのノーベル賞作家)、Derek Walcott (セント・ビンセント島のノーベル賞作家)、Raja Rao (インド)、Salman Rushdie (インド)、Edwin Thumboo (シンガポール)らがこれまで長年にわたり外円の英語の生命力と創造性を表現し、発展させてきたことは注目に値する。これはもはや(限られた機能しかもたない、「劣った」話し言葉にすぎない、などの侮蔑的な意味での)ビジン英語ではなく、十分に発達し、完全な機能を備え、文語体をも含んだ独自の「標準」を持つ諸英語のひとつとして論じられているのである (cf. Kachru, 1990: 159-173, Ashcroft et al., 1989)。

2 英語教育への提案

それでは、日本の英語教育、特に中・高の教育では、前節で簡単にふれた世界の諸英語や英語で表現される文化の多様性についてどのように扱われているのだろうか。文部省検定教科書および付属の音声教材では、(戦後はイギリス英語に代わり)理想化したアメリカ英語が唯一の標準となっているため、生徒がそれ以外の英語にふれる機会はほとんど与えられていないのが現状で

あろう。また、国際理解の推進が外国語教育課程の主要目標の一つであるにもかかわらず、紹介される英語文化の大半が、アメリカおよび(より少なく)イギリス文化に偏っている(松本 1995)。こうした中等教育での英米偏重の図式の唯一の例外はA111(外国語指導助手)の採用で、大半が米国籍出身者ではあるものの、他の中心円の地域、すなわちオーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アイルランドなどからも採用されている。この点に関しては、後に再度言及したい。

では、このようなアメリカ英語およびアメリカ文化への偏重は、どのような結果を招くであろうか。日本の英語教育の現場での十一年間の経験に基づき、筆者が懸念するのは、英語が「西洋人のものである」という意識を持たせ、英語への心理的距離を招き、結果的に日本人自身の伝達手段としての英語の捉え方が育たないのではないかということである。これは、また先述の世界の英語の多元化についても誤った認識を生み、標準英米語以外の諸英語(もちろん、日本人自身によるものも含め)を、英米の規範に照らして「不完全」だと見下す見方につながるのではないだろうか。逆に外円や拡大円の国々の英語の非母語話者が、彼ら自身の英語をいかに主張しているか、また今日いかに多様な英語が生まれているかを認識させることは、(西欧の)母語話者を規範とする見方から離れ、より創造的な英語使用への道を開くのではないかと考える。そうなれば、西欧の規範から見た「間違い」を恐れるのではなく、自らのアイデンティティを表現する(あるいは、新しいアイデンティティを作り出す)手段として英語を捉えられるようになるかもしれない。このように、前節で述べた英語と英語文化の多元化に触れ、これらに対する意識を

高めることで、日本の生徒が得るものは少なくないのではないだろうか。

以上の観点から、以下四点を提案したい。以下の提案は、世界の英語の多元化の認識と受容を前提とし、同時に、現在優勢な英米語および英米文化を規範とするモデルへの挑戦として、英語の多元化を認識するものでもある。

まず、英語教育における「国際理解教育」としての役割をより広く捉え、英語の使用が一般的な非西欧諸国、つまり外円の国々へも視野を広げる必要がある。具体的には教科書の内容面の修正や（後にふれるように）査員教師やALTなどを外円の国から招くなどが挙げられよう。

次に、標準英米語以外の英語の有効性について、まずは教科書執筆者と教師、そして生徒が認識する必要がある。具体的には、①中学、高校での英語教師の補佐として、中心円からの出身者に加え、外円の国からも流暢な英語話者を招へいする（この点についての詳細は、Smith (1995) を参照）。②大学等の教職課程に世界の諸英語についての授業を設ける。③研修や交換プログラムなどの日本人英語教師の派遣を、中心円だけでなく外円の国へも広げる。④外円の国の中学・高校から英語や他の教科の教師を招いて、研修や教育に携わってもらうことで日本人英語教師の世界の諸英語への意識を高めるなどが挙げられよう。以上は、日本人英語教師の世界の諸英語への意識を高め、これを実践に移すことを容易にするための提案である。

三つめに、「日本人の英語の規範」（特に、音韻的、語用論的、談話的、文体的規範）の研究を含んだ、非母語話者同士の会話における英語 (cf. Thompson, 1996) の研究も重要である。これらの成果は、英米人のような英語を日本人の目標とする代わりに、別の基準の模索につながるかもしれ

れない。（例えば「ネイティブなみの」発音「母語話者の発音自体均一ではない」、アイコンタクト、握手の習慣、姓でなく名で呼びあう、はっきりと理由を述べて誘いを断わる、西欧的意見の述べ方（これは実際高等学校のオーラル・コミュニケーションの教科書に見られる）などを強要しない、別の基準である。）（同様の議論については、Honna and Takeshita, 1995 を参照）

最後に、生徒が英語以外の外国語に触れ、それらへの意識を高める機会を増やすことの重要性も見逃せない。しかし、日本の学校教育での英語の（他言語に対する）優勢は、当面続くであろう。事実、中央教育審議会の第一次答申は、（多言語使用を主眼に入れた）国際理解教育の初等教育への導入に対する提案であったが、一般には、「英会話」の導入とはほぼ同義に解釈されている（同様の批判については、日本英語教育改善懇談会、1997: 88 を参照）。

前記の提案は、世界的規模の多言語、多文化主義が英語教育を通して認識、促進されることをねらいとするものである。世界の諸英語の多様性と外円（及び中心円）における多言語使用の実態を認識することは、正しい方向、つまり英語以外の言語やアメリカの主流文化以外の文化について、日本人生徒の意識や興味を高めるための第一歩となるであろう。

結論

本稿では、現代の英語の規範および使用の多様化について触れ、それが日本の英語教育で概して認識されていない点を指摘した。本稿での提案は、Tsuda (1993) らの指摘する、日本におけ

るアメリカ英語とアメリカ文化のヘゲモニーへの抵抗の、より現実的な提言となるであろう。また、英語は母語話者のもの、あるいは西欧を含む特定の地域のものとする見方に対抗する新たなモデルをも提案した。これは英語を「外国の」支配的な言語でなく、日本人のアイデンティティを表現するもう一つの手段、つまり国際コミュニケーションの場で日本人が独自の方法で、独自の目的のために使える言語としての捉え方の提案でもある。

謝辞

日本語で本稿を準備するにあたり、井上全子さんに協力して頂いた。ここに記して、謝意を表したい。

参考文献

- Achebe, C. 1965. "English and the African writer." *Transition* 4(18): 27-30.
- Ashcroft, B., G. Griffiths, and H. Tiffin. 1989. *The Empire Writes Back: Theory and Practice in Post-Colonial Literatures*. London and New York: Routledge.
- Crystal, D. 1995. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crystal, D. 1997. "Watching world English grow." *IATEFL Newsletter*, no. 135, 10-11.
- Honna, N. and Y. Takeshita. 1995. "Teaching English as a language for International Communication in Asia: A Japanese Perspective." "Expanding Horizons in English Language Teaching" 第3回国際会議 (タイ、クソムン Chulalongkorn 大学 Language Institute 主催、一九九五年十一月二十九日) での発表。
- Kachru, B. 1985. "Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the Outer Circle." In Quirk, R. and H. Widdowson (eds.), 1985, 11-30.
- Kachru, B. 1990. *The Alchemy of English: The spread, functions and models of non-native Englishes*. Urbana: The University of Illinois Press. (原稿は一九八六年に Oxford: Pergamon Press より出版)。
- Kachru, B. (ed.). 1992. *The Other Tongue: English Across Cultures* (2nd edition). Urbana: The University of Illinois Press. (初版は一九八二年に出版)。
- Kachru, B. 1993. "Introduction to the symposium on linguistic imperialism." *World Englishes*, 12/3: 335-36.
- Kachru, B. 1994. "World Englishes: Approaches, issues and resources." In H. D. Brown and S. Gonzo (eds.). *Readings on Second Language Acquisition*. New York: Prentice-Hall.
- Kachru, B. 1996. "World Englishes." In McKay, S. L. and Hornberger, N. H. (eds.). *Sociolinguistics and Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press, 71-102.
- 日本英語教育改善懇談会 一九九七「外国語教育の改善に関するモデルと提言の論拠」『英語教育』46/1: 86-88
- 大野多喜夫 一九九五「中学校英語教科書に見られる国際理解性——地球の視野からの分析」*The Language Teacher*, 19/6: 18-21
- Phillipson, R. 1992. *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press.
- Quirk, R. 1985. "The English language in a global context." In Quirk, R. and Widdowson, H. (eds.), 1985, 1-6.
- Quirk, R. and Widdowson, H. (eds.). 1985. *English in the World: Teaching and Learning the Language and Literatures*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, R. C. 1995. 「日本の英語教育における外国人教師のこれからの役割」『現代英語教育』六月号, 16-17.
- Stevens, P. 1980. *Teaching English as an International Language: From Practice to Principle*. Oxford: Pergamon Press.
- Thompson, A. 1996. "Exploiting Back: New genres of English at cultural interfaces." 言語権利に関する国際会議 (Hong Kong Polytechnic University、一九九六年六月二十四日) での発表。
- Tsuda, Y. 1993. "Communication in English: Is it anti-cultural?" *The Journal of Development Communication*, June, 1993.
- Wong, I. 1982. "Native-speaker English for the third world today?" In Pride, J. M. (ed.) *New Englishes*. Rowley, Mass.: Newbury House.